

家庭教育支援協会

会報誌 12号

相補的なケアへの欲求と寄り添うことの確信

ーパパとママの役割分担ー

家庭教育支援協会理事長
二川 早苗

先日、ある雑誌から新米パパとママのために父親と母親の役割について書いてほしいという依頼があった。我が家は参考にならない。たぶん。子どもが小学生のとき、よそのうちから帰ってくるなり、「うちの家って、よそのうちと違うんだね」と言ったから本当だ。私は、というか、うちはずっと試行錯誤中だ。うまく分担できる方法があれば知りたい。

もしかしたら父親と母親の役割を固定化した役割分業としてとらえると、うまくいかないのではないか。威厳のある母親がいてもいいし、穏やかで大地のような父親がいてもいい。要は、「阿吽の呼吸」で、子どもに接することができれば、子どもを追い詰めることもないだろう。子育てに関して、両親の意見が一致することは、一見よさそうだが、方針だけでなく、取り得る行動まで両親が同じだと、子どもが息苦しくなることはないだろうか。しつけの歯止めが効かないことになりはしないか。2018年10月、目黒区で起きた児童虐待事件では、母親もDVを受けていたという事情があるにせよ、父親の「しつけ」と称する行為に歯止めをかけることができなかった。子どもの眼差しからすれば、止めに入ってくれない母親も、虐待する父親も同じ側立つ人間に見えただろう。

子育てや介護といったケア行為は、「向かい合う」関係が多い。なるほど、目を見て話すことは大切だ。介護をするときも、相手のちょっとした表情の変化を読み取りながらニーズに応えることができれば、質の高い介護となるだろう。だが、しかし、そっとしてほしいことはないだろうか。誰にでも思い出したくない過去があるのと同じように、子どもにも、親に知られたくないことがあるだろう。だからと言って親はそのことをなかったかのように扱えというわけではない。「向かい合う」関係ではなく「横に並ぶ」関係があってもいい。そっと寄り添うのだ。

心理学者の河合隼雄は、母性原理を「包む」原理として、やさしさ・受容・保護とし、父性原理を「切る」原理として、きびしさ・規律・鍛練とした。ここぞというときに叱責するきびしさも、無条件で受け容れる「安全基地」も必要なのだ。受容する役割と、規範意識を身につけさせる役割のどちらが欠けても子どもの自律／自立は覚束ない。近代から続く標準家族は、パパとママと子ども二人という構成だが、もはやそのような構成は標準とはいえない。シングルマザー、シングルファーザー、保育士や幼稚園の教師が父親と母親、両方の役割を担わなければならないこともあるだろう。だとすれば、役割分担に拘るよりも緩やかに補い合う関係のほうがよほど現実的だ。



昨年8月18日(土)に行われた日本家庭教育学会にて家庭教育支援協会より個人発表された石井 登氏と平林直人氏の内容をご報告申し上げます。

長岡京市における活動報告 —家庭教育が育む新しい学び—

家庭教育支援協会理事 石井 登

‘17年12月に行った子育て支援講座を京都府長岡京市での家庭教育活動の実践例として発表をいたしました。支援講座のタイトルは「変わる学校教育 ～そして新たな学びとは～」。事前に保護者から出された“困っている問題”アンケートにみんなで意見を出し合う形式で行いました。この講座は、親の主体的な学びや気づきを促すことを目的としています。

‘22年から学校教育内容が大きく変更されます。支援講座で話し合った内容を例に、学校教育は ○なぜ変わるのか ○どのように変わるのか ○どんな学力が必要なのか ○親や子どもの対応 と発表手順を決めていたのですが、当日、準備した数の3倍近くの参加者でレジュメが使えなかったり、パワーポイントの操作を失敗して機能しなかったり、結局途中で時間切れの残念な結果となりました。

教育内容がどのように変わろうとも、学習能力の基盤は、学びへの姿勢や学習に取り組む態度を身に付けることにある。それこそが家庭で培われるものだと考えている。

家庭教育の意味を親自身が再認識し、親子で学び合える機会や場を提供できるよう地域の人たちと一緒に努力して行きたいと思っています。



脳の発達と学習、自立、社会性 —脳の発達と社会的・感情的変化—

家庭教育支援協会理事 平林 直人



私たちは教育について様々な考えを持って行っているが、それは本当に学習者のためになっているのだろうか？

人の成長が20年かかるのは生きるために必要な学習をするためで、本能的に人は学習意欲が高い。人の脳は3歳まで環境から受ける刺激によって脳と体の各箇所をつなぐシナプス結合が増え続け、3歳からはその刈り込みが始まることで、環境への適応を強める。4歳頃から記憶領域である大脳皮質が厚くなり、思春期には体に変化し社会に対する感性が鋭くなり、感情的に不安定になる。学習者は常に変化しており、学ぶためには自分に合わせて自ら学ぶ環境を整える必要がある。

小さい子供は特定のことに敏感・こだわる時期があり、その時は子供の好きなようにやらせることで、子供は精神の安定と身体能力と知識を獲得する。大人の都合で邪魔してはいけない。また、早期教育で育った子は大脳皮質がより厚くなる傾向があるが、頭の回転が速いとは限らない。大切なのは思考のスピードであり、シナプスと記憶領域の繋がり方である。IQが121を超える天才はそれほど大脳皮質が厚くなく、小さい頃から好きなことを見つけ一所懸命に取り組んでいる事が多い。

変化の時代を支えるのは自立した人であり、結果を出せる人で、今まで以上に優秀な人材が必要になる。そのためには本当の学習者優位の学習環境を整える事が必要である。

活動報告② 家庭教育支援協会第2回会員研修会

2019年2月2日

今年2月2日(土)に行われた家庭教育支援協会第2回研修会で攝待逸子氏と尾形有三氏が発表された内容をご報告申し上げます。

『おひさまキッチン(子ども食堂)～盛岡市松園地区における実践報告～』

家庭教育支援協会理事 攝待 逸子



昨年8月に開催された日本家庭教育学会において「家庭教育支援のあり方を考える」として文科省専門官の福澤氏の講演後、全体会にパネラーとして上記タイトルについて発表。今回その内容について再度発表させていただきました。家庭教育支援協会会員一人の活動ではありますが、会員皆様の参考になればと思っています。

私の住む地域は、1972年(S.47)より、入居が始まったいわゆるニュータウン。入居から50年近くたっています。戸建ての地区と東西南北4棟の県営アパートがあり、人口は約17,000人。少子高齢化が確実に進んでいる地域です。地元で30年活動している女性市議より民生委員に打診があり、地域町内会のボランティアの協力も得て、2017年11月に発足しました。この活動の基本的な考え方は、①ごはんを通じて地域でつながりを作り、子どもを見守り育てる垣根のない居場所づくり。②様々な世代間交流(地域のサロン)。③子どもが地域の中で大事にされ、ホッとできる食堂をめざしています。月1回、これまでに17回開催され、参加者は平均60名前後。子ども同士や親子連れ、地域のお年寄りなどが参加しています。場所の確保、スタッフの協力体制、運営費、衛生管理、アレルギー対策など、開催するまでにクリアする事は沢山ありましたが、始めてみて感じた事は、「食べられない子どもはかわいそう」と憐れむよりも、「子どもは社会全体で育てていく」というプラス思考の認識の重要性です。活動に関わる人たちはもちろん、そのまわりの人にもそういう考えを共有してもらう事が大事で、個々の小さな協力もたくさん集まれば、それが大きな力になっていくのではないかと考えています。「このご飯は美味しいね。」と言ってくれる子どもの笑顔がスタッフの力になっています。

『家庭教育における道徳教育(教科化)』

家庭教育支援協会理事 尾形有三



平成30年度第2回研修会(平成31年2月2日(土)開催)のテーマ2として、いじめの根絶のために全国の公立小学校で「特別の教科 道徳」(道徳科)が今年度に全面実施(教科化)され、今後の家庭における教育の振興に努めるべく、講演内容をご理解いただき易くするために事前にコラムをHPへ掲載させていただき、講演の意図が伝わりやすいよう、自己紹介と本題という構成とし、コラム『尾形家の家庭教育』(<http://essay.kateikyoiiku.com/?eid=191>)の内容も含めて私の所属団体、家族、名前の由来、家業、校訓、目標、家訓、教育方針、お願い

等のご紹介後に、コラム『家庭教育における道徳教育』(<http://essay.kateikyoiiku.com/?eid=196>)の内容を出

典元が分かる形でPPTにてご説明(講演後の質疑応答で補足させていただきました通り『学校教育における道德教育』を家庭教育へそのまま取り込むというご提案ではございません。)させていただき、「父母その他の保護者が、学校教育における道德科教育や市民科教育についても学び、子の教育について第一義的責任を有する『家庭教育者』として『家庭教育における道德教育』について主体的に考え、語り合い、もっともっと子どもたちの幸福を追究していける教育環境を共に整備していきませんか。」という発問のご提案の発信を意図して、「家庭教育の道德教育(教科化)」という演題でご講演させていただきましたが、いかがでしたでしょうか。

★家庭教育支援協会ホームページ 2017年7月コラム「尾形家の家庭教育」と併せてご拝読ください。

活動報告③ 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会

2019年2月2日

2019年2月2日、倫理研究所内(紀尾井町)で日本家庭教育学会主催『家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会』が開催されました。当日の内容を木村孝子氏に報告していただきました。

家庭教育アドバイザー 木村 孝子

2019年2月2日、倫理研究所(紀尾井町)にて日本家庭教育学会主催『家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会』が御講演と家庭教育師・アドバイザー活動報告の二部構成で開催されました。

講演・浜崎隆司氏(鳴門教育大学大学院教授)

「親が子どもにできること・できないこと—選択理論心理学で学ぶ親子関係—」

浜崎氏は、親が最も優先すべきことは「子どもと良い関係を築くこと」であることを選択理論心理学を用いて講演してくださいました。選択理論は、すべての行動は自らの選択であると考えられる心理学で、行動を選択できるのは自分だけであり、他人に行動を直接選択させることはできない、言い換えれば「過去と他人は変えられない、変えられるのは未来と自分だけ」ということであると伺いました。

そして「交渉していない決まりごととは「きまり」や「ルール」ではない」と御説明がありました。これは、外(発)的コントロールと内(発)的コントロールのそれぞれ7つの習慣から導くことができ、外的な7つの習慣とは「批判する」「責める」「罰する」「脅す」「文句を言う」「ガミガミ言う」「褒美で釣る」で、人間関係を破壊する致命的な習慣であるのに対し、内的とされる7つの習慣は「傾聴する」「支援する」「励ます」「尊敬する」「信頼する」「受容する」「意見の違いを交渉する」ということとお教えくださいました。

親子の人間関係は子どもが10歳を迎えるころからフラットなものになってくるので、親の考えで子どもをコントロールしようとするれば人間関係は崩壊してしまう。それを防ぐには親は「自分の正しさや感情を提示する」ことよりも「人」と「人」としての「良好な人間関係」を築くことを優先するべきであると御講演を締めくくられました。

小休憩をはさみ、公益社団法人スコレ家庭教育振興協会様、東京家庭教育研究所様、家庭教育支援協会の活動報告がございました。

活動報告④ 二川早苗理事長 博士号取得！おめでとうございます

昨年、当協会の理事長である二川早苗氏が筑波大学大学院博士過程を修了後、博士号の学位を取得されたのでご報告申し上げます。そして二川理事長には、心よりお祝い申し上げます。博士論文のテーマは、「ケアの社会：ケアの倫理を巡る研究」です。今後の日本の家庭教育への発展に期待されます。